

大学生の日常談話の一断面と自己評価

谷部 弘子

1. はじめに

筆者は、大学機関で日本語教員養成に携わっており、教授法や教材分析に関する演習科目を担当している。学習目的に応じて何をどう教えるか、といったことが中心になるが、単に知識や技術を学ぶのではなく、日本人学生には母語である日本語を客観的に観察し、内省に基づいてまず自分自身で考え分析することを一つの目的としている。そのための活動の一環として、受講生には、自分自身を含む二人以上の談話の録音・文字化を課題として提出させている。この課題の遂行を通して、ほとんどの受講生は、はじめて自分自身の言語行動を顧み、日常の話しことばの様相を意識化することになる。また、テープを聞きながら書き起こす作業によって、音声と文字との隔たりを痛感する。この課題はまた、私自身にとっても、若い世代の言語行動と意識をあらためて突きつけられる場として、刺激的である。日本語教師を目指す、あるいは日本語教育に関心のある若い世代がどのように自分自身の言語行動を評価しているか、実際にどのような言語形式を採用しているか、話しことばの実態の一端として報告したい。

2. 資料について

資料は、2種類ある。一つは、受講生が家族、友人らとの私的な日常会話を録音し、文字化したもので、各々5～10分である。もう一つは、文字化作業によって気付いた点を書き記したレポートである。後者は分量の指定をしなかったため、簡単なメモ程度のコメントも含まれる。計52名分の資料で、収集期間は下記の通り。

第1期：1996年1月／18名（男2女16）

第2期：1997年1月／15名（男4女11）

第3期：1999年1月／19名（男5女14）

第1期、第2期の資料は文字化資料とコメントのみであり、実際の録音資料と文字化の妥当性については検証していない。第3期分については、文字化資料と録音資料とも提出してもらい、筆者が聞き直し、不適切な部分については修正を行った。

3. 日常談話の特徴に関する気づき

受講生が、自分自身を含む日常談話の特徴として気づいた点、コメントした点は、おおよそ次の15の項目に分けられた。

- | | |
|----------------------------|-------------------|
| (1) 縮約表現 | (2) 助詞の脱落 |
| (3) 省略 | (4) 倒置 |
| (5) あいづち | (6) 繰り返し |
| (7) 言いよどみ／言いさし | (8) 重なり発話／先取り発話 |
| (9) 指示詞の多用 | (10) 終助詞の多用 |
| (11) 音便化 | (12) ある特定の語彙の多用 |
| (13) ある特定の文末表現の多用 | (14) イントネーションの重要性 |
| (15) 談話展開に関する問題（唐突な話題転換など） | |

(1) から(11) は話しことばの特徴として一般によくあげられる項目である。一人の受講生がこれらの特徴を網羅してあげていることはないが、総体的に見れば、よく特徴をつかんでいるといえる。この中で、もっとも多くの受講生が指摘したのが、(12)と(13)の項目である。具体的にどのような語彙や表現がとりあげられていたか、また、それらに男女差が見られるか否か、以下に例をあげてみよう。

3.1 多用される語彙および文末表現

a. ヤツ（形式名詞化）

・99F14⁽²⁾：で、アルマゲドン〔映画名〕のほかにやってないの↑ ほかの
やつがいいんだけど。

・99M2：ああ、ホラーとグロイやつ意外だったらなんでもいいてこと↑

b. ナンカ

- ・99F11：まえの一、俵万智が、なんかねーテレビでゆってたよ、なんかねー車を運転するのすっごいきらいなんだってー。
- ・96F11：なんかばれなかったっていうか、なんかそのままですまされたよね。

c. ～トカ

- ・99M3：だ、春だとさー、結局高校生とかもいけるじゃん（あー）、だ、普通の学校とかも3月は休みじゃん。
- ・96F15-友人F：あー、でもぜったい長男とかだったら（うん）しかもなんかさー（うん）東京とかに（うん）いるとかじゃないじゃん。

d. デモ（非逆説）

- ・97F11：私、でも、いまとこまだ、切った授業はない、かな。
97F11-友人F：[相手名前]ちゃんはないねえ。
97F11：うん。
97F11-友人F：なんか、でも、こう、レポート書いててー、うん、例えば、なんか、遅刻しちゃってー。
- ・96F14-友人F1：[名前]先輩も[大学名]じゃなかった↑
96F14-友人F2：あーそうだ。
96F14-友人F3：そのあと、でも、絵本かなんかの専門学校行ったんじゃなかった↑

e. ～ジャン

- ・97F10：でもピッチじゃなかったら、連絡のしようがないじゃん。…
97F10-妹：公衆電話からかけてくれればいいじゃん。
- ・97M4：あのさ、[相手名前] さあ、ない、ホームページ開くの、設定だけって言ってたじゃん、あと。

f. ～ッテイウカ／ ～ッテ感じ

- ・96F12：Tシャツってもうこの季節ちょっと違うでしょって感じ。
- ・97M4：それ、やればいいじゃん、ふふふ、やればいいじゃんっていうか。

g. 語尾の引き伸ばし（～サー、～ケドー、～テーなど）

- ・99F4：なんか河合塾の、河合塾もそういう講座ひらいてるみたいだったん

だけど一、もうすでに、せんげつに始まってて一、どうでしょうと思って一、で、授業料もちょっと高め↑だったのね。

- ・ 97F3-友人F：…家帰っても、パパもなんか出張だったみたいで一、結局[発話者名前：自称]が最初に聞いちゃって一、あつ、まずいな一、とか思って一、でも、やっぱり聞かれるよりはいいや一、とか思って一、…

h. ～モン

- ・ 97F12-友人M：だって、おいら行くつもりなかったもん。
- ・ 99F11：わかんないけど、なんか予約が埋ってるんだもん。

i. アッソウナンダ

- ・ 99F11-友人：あつすごーい、温泉↑
99F11：うん、温泉。
99F11-友人：いいな一。
99F11：でもなんか疲れたよ。
99F11-友人：あつそっかそうなんだ。
99F11：うーん、なんかねーひたすら車に乗ってた感じがする一。
99F11-友人：あつそうなんだ一。
- ・ 96F2：バイトはイケてるんですかね一、とかって、[人名]くんが言って一、あ、いいかもしれないよて一、な、マックみたいの、やりたいんだて一。
96F2-友人F：あ一そうなんだ一。

以上の他、場つなぎ的な「デ／ソレデ」の用法、「スゴイ／ヤッパリ／全然／異常ニ／超」などの強調表現、「ダッテ」「～ミタイナ」、聞き手に同意や確認を求める「～デショ」「～ヨネ」などがあげられていた。これらの語彙表現の多用については、すでに若者ことばや近年の話しことばの特徴として言及されているものが多く、特に目新しいものはない。ここで見ておきたいのは、こうした表現を話者自身がどのように見ているかということである。佐竹（1995）は、若者たちの話しことばで注目される形式として「～じ

やないですか／～とか／～みたいな／～だしい／～たりしてー」をとりあげ、断定を避け、表現を和らげる、という共通性が認められるとし、さらに、「断定回避」の表現やぼかし表現、半クエスションが使われる原因は、「(自分の)発言、意見の不確かさ、不十分さが明白になることへの恐れや、聞き手と一緒にでないことに対する不安」にあると解して「ソフト化」と名づけた。たしかに、受講生のコメントの中には、上記の解釈に近い表現が見られるー「これ(「ナンカ／～トカ／～ッテイウカ」)は無意識にでている言葉なのですが、今回文字化してみて非常に多く使われていたので、驚きました。物事をはっきりと肯定しないで、やわらかい言い方をしたいときに使っているような気がします」「私たちがよく使う『でも』は、…自分が話し始める合図または前置きのようなものとして、口調をやわらげるために…使われている。『なんか』も…単に間をとったり、口調をやわらげるために使われる私たちの話し言葉の特徴であると思う」など。ただし、こうした表現が発話者の自信のなさや不安や恐れから来ているという理解には疑問が残る。受講生も背景心理については言及していないが、「会話の間をうめるために『なんか』というそれほど意味を持たない言葉をよく使っている。話している内容をまとめてしまったらすぐ短い文で終わることだけれど、コミュニケーションをとるために、会話を楽しんでいると思う。『すごい』とか『ほんと』とか誇張的な表現を使って盛り上げようとしている」というコメントにも見られるように、聞き手との対立を避け会話の持続を支えようとする積極的な意識もあるのではないだろうか。語尾の引き伸ばしやとくに驚きをとまなわない場面での「アッソウナンダ」「アッソッカー」といった表現の使用についても、同様の意識が感じられる。

また、小林(1996)は、前述の佐竹(1995)の論を受けて「っていうか」「なんか」等も分析の対象に加え、高校生の話し合いの発話においてこのソフト化ストラテジーがきわめて多く用いられていることを報告している。高校生と大学生の間に大きな世代差はないと考えていたが、受講生には高校生とははっきり一線を画す意識が見られた。例えば、97F10は「妹は19才、私は23才で女子高生ではないが、今かなり批判されている女子高生言葉を連発

している。だらだらと話しているときはその場つなぎに『なんか』や『～感じ』が出てくるものと思われる。これは、物をはっきりとは、断定しない言い方であって、意思が弱い印象を客観的に見て受ける」と否定的な評価をしている。

文末表現でもっとも目についたのは「～ジャン」である。「～ジャン」は井上（1998）によれば、「ではないか」にさかのぼり、東海地方から東京にさらに全国に波及していった表現であるが、今回の資料でも男女、出身地域にかかわらず頻出し、50代の父親の発話にも複数例見られた。すこしあらたまった場面での「断定回避」表現「～じゃないですか」に通じる用法も少なくない。

3.2 表現の男女差

3.1 であげた語彙や文末表現はいずれも男女の発話者双方に見られた。女性や子どもに多いとされる「～モン」も複数の男性の発話に見られ、とくに男性の日常談話に特徴的な表現形式としては「うるせーな／すげー」といった発音の変種が目立つ程度であった。

ことばの男女差については、ふつうあらたまった場合、丁寧体の使用にはその差は小さく、くつろいだ場面、普通体の使用ではその差が大きく顕在化する。日本語教育の場では、丁寧体から普通体への移行の段階で文末の言語形式に見られる男女差が提示されることが多い。が、若い世代では、くつろいだ場面で逆にこの差が小さくなっている。下の例に見られるように、「わ」を介在させずに「ね／よ」が接続する形式は女性話者にごく普通に見られ、逆に「わ」を介在させた例は1例も見られなかった。尾崎（1999）は、「だわ」「わ」「くだ」の省略形を「現在『死』を迎えつつある女性語」と表現しているが、大学生の日常談話では「朝だよ／朝よ」「行くよ／行くわよ」といった男女の図式化はまったくあてはまらない。

- ・97F10：だって電話かけるのは相手だよ。自分じゃないよ。
- ・97F5：そうだね、そんなおねえちゃんの会社の人はおねえちゃんにまかせるよ。

次の例は女性受講生とその弟の会話であるが、表層の言語形式から男女を判別するのはきわめて難しい。

・97F8：あしたパーティーなの知ってた↑

97F8-弟：ああ。

97F8：夜いろよ。

97F8-弟：いないんだ、B [自称]。

97F8：なんで↑

97F8-弟：あしたはね、新年会なの。それは言っている、ていうか、ちょうど椅子がたないから、ちょうどいいわって言ったから。

97F8：(笑) やけにシンプルな答えだ。

97F8は「私は紙に書いているとどちらが弟かわからないほど男言葉を使っている。弟も例えば3枚目のまんなかあたりで『新年会なの』と言っているが、これはどちらかといえば女言葉かもしれない」と、振り返っている。

上昇調の「～の↑」の形式はすでに男女両用の形式として認知されているが、下降調の「～の↓」と「～んだ」は日本語教科書でもまだ男女の対立形式として示されることが多い。筆者が大学生を対象に行った調査（理由や状況説明の場面を提示し会話文を作成してもらう）では、「～んだ」の使用に男女差は見られなかったが、「～の↓」の形式を記述した男性は見られなかった。しかし、今回の資料では、28名中11名の男性話者に使用例が見られ、この世代の男性にとって決して例外的な言語形式ではないことがうかがわれた。以下は男性話者の発話例である。

・99F13-弟：だから、宇宙飛行士でも、なんか、それぞれねー、キャラクターが濃いのよ。

・99M5：でもその椅子と椅子が、椅子が、なんか直角に近くて、かつその椅子と椅子のあ、間が狭いわけよ、だー、めちゃめちゃからだん悪いの。

4. 自己評価

それでは、受講生は以上のような自分たちの日常談話をどのように評価し

ているのだろうか。これについては、肯定的な評価よりも圧倒的に否定的な評価が多い。まず、第1に「話しことば＝不完全＝非文法的」という見方がある。つまり、「本当の正しい日本語とは大きく違う」「完全な文の形で談話することは少ない」「文法通りではない」「文法が乱れている」「崩れている」「正確ではない」「不完全な会話」というのである。

また、特徴的な語彙表現の多用については、こうした表現の多用が同世代の若者に共通する現象であると認識しながら、やはりマイナスの評価をくだしている。「おかしい会話」「すごい日本語」「あいまいな表現」などということばで評しており、音声上の特徴についても「あいまいな発音」「乱れた発音」と見ている。かれらは「ここまで汚いことば遣いをしていたのかと驚き」、「日本語母語話者であるにもかかわらず使用語彙が貧困」であり「丁寧さに欠ける」と感じている。

5. おわりに

以上、簡単に現代の大学生の話しことばの実態と自己評価の一端を報告したが、総じて、彼等は規範意識が強く、自分たちの日常談話を批判的に見ているということが言えるようである。なお、99年の課題では先行研究からいくつかの文字化の原則を示し、受講生にその選択をまかせたが、音をなるべく忠実に文字に写そうとしたとき、あるいは発話時の感情やニュアンスを伝えようとしたとき、一つの文字体系による表記（例えばすべてカタカナ表記にするなど）には無理がある、と感じ指摘した受講生もいた。話しことばの動的な様態を表すには文字の選択使用が欠かせないという認識である。

大学生の日常談話の実態としては談話展開の特徴と男女差等ほかにも興味深い点があったが、それらについては別稿で論じたい。

注

- (1) 受講生の中には例年外国人留学生もいるが、今回は日本語母語話者の資料のみ扱った。
- (2) 「99F14」は99年の女性受講生(No. 14)の発話であることを表す。Mは男性。

参考文献

井上史雄（1998）『日本語ウォッチング』岩波書店（岩波新書540）

尾崎喜光（1999）「女性語の寿命」『日本語学』9月号 pp. 60-71

小林美恵子（1996）「高校生の断定回避表現－「話し合い」の談話を中心に－」『ことば』
17号 pp. 31-43

佐竹秀雄（1995）「若者ことばとレトリック」『日本語学』11月号 pp. 53-60